

「藤前干潟の保全」

9 班

学籍番号	氏 名
C07041	古橋 慧
C07042	前田 亜由美
C07043	松丸 瑛志
C07044	丸山 聖史
C07045	三嶋 大輝
C07046	溝口 裕一郎

アドバイザー教員：長谷川教授 大東教授

目 次

	ページ
1. はじめに	1
2. 藤前干潟について	1
2. 1 藤前干潟とは	1
2. 2 歴史	2
2. 3 ラムサール条約	2
3. 干潟の生物について	3
4. 問題と対策	4~5
5. 参考文献	6
6. 謝辞	6
7. 感想, 各自の貢献内容	
C07041 古橋 慧	7
C07042 前田 亜由美	8
C07043 松丸 瑛志	9
C07044 丸山 聖史	10
C07045 三嶋 大輝	11
C07046 溝口 裕一郎	12

1. はじめに

藤前干潟はラムサール条約に登録されていて日本有数の干潟です。藤前干潟には世界中から渡り鳥がやってきて、渡り鳥たちの休憩ポイントになっています。

そんな藤前干潟をどう保全していくのか自分たちで考えるのが本研究の目的です。

2. 藤前干潟について

2. 1 藤前干潟とは？

藤前干潟は、伊勢湾に流れ込む庄内川、新川、日光川の河口に広がる砂・泥から成る干潟を含む区域でさらに、庄内川河口干潟、新川河口干潟、そして藤前地先干潟の3つの干潟に分けられます。

これら3つの干潟を含む323haの区域が2002年11月18日に「藤前干潟」としてラムサール条約に登録されました。（以下、明記されている「藤前干潟」とは、この区域のことを言います。）

藤前干潟は、名古屋市の南西に位置し、大都市部としては貴重な自然を残している場所となっています。

2. 2 歴史

昭和56年7月

- ・名古屋港港湾計画で西一区（藤前干潟の一部）を105haの廃棄物処理用地等として位置づけられる

平成3年3月

- ・環境省（当時）が鳥類保全の観点から計画の縮小を指示する

平成4年3月

- ・自然環境の保全に配慮して、埋め立て面積を52haに縮小する

平成5年12月

- ・埋め立て面積52haのうち、46,5haの計画で事業実施を決定する

平成6年1月

- ・環境影響評価手続きが開始される

平成11年2月

- ・西1区埋め立て事業の中止が市会臨時議会において表明される

平成14年6月

・国設藤前干潟鳥獣保護区・特別保護地区の指定に関する手続きのうち、環境省から名古屋市に対して非公式意見照会がなされる

平成14年10月

- ・藤前干潟を国指定鳥獣保護区・特別保護地区に指定する官報告示が発表される（3日）
- ・ラムサール条約手続きが開始される（3日）
- ・藤前干潟を「国際的に重要な湿地」とする官報告示が発表される（15日）

平成14年11月

- ・藤前干潟はラムサール条約の「国際的に重要な湿地」として登録される（18日）

平成17年11月

- ・この年に行われた締約国会議では、平成16年末から平成17年を象徴とする自然災害、貧困削減、鳥インフルエンザなどに関する議論が行われ、25本の決議が採択された

2. 3 ラムサール条約

ラムサール条約とは1971（昭和49）年イランのラムサールで開催され、「湿地および水鳥の保全のための国際会議」で、「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」が採択された。

開催地のイランにちなみ「ラムサール条約」と呼ばれている。この条約は7ヶ国が締約国になり、1975年12月21日に発行された。

条約の内容

特に水鳥の生息地等として国際的に重要な湿地と、そこに生息・生育する動植物の保全を促進することを目的としている。

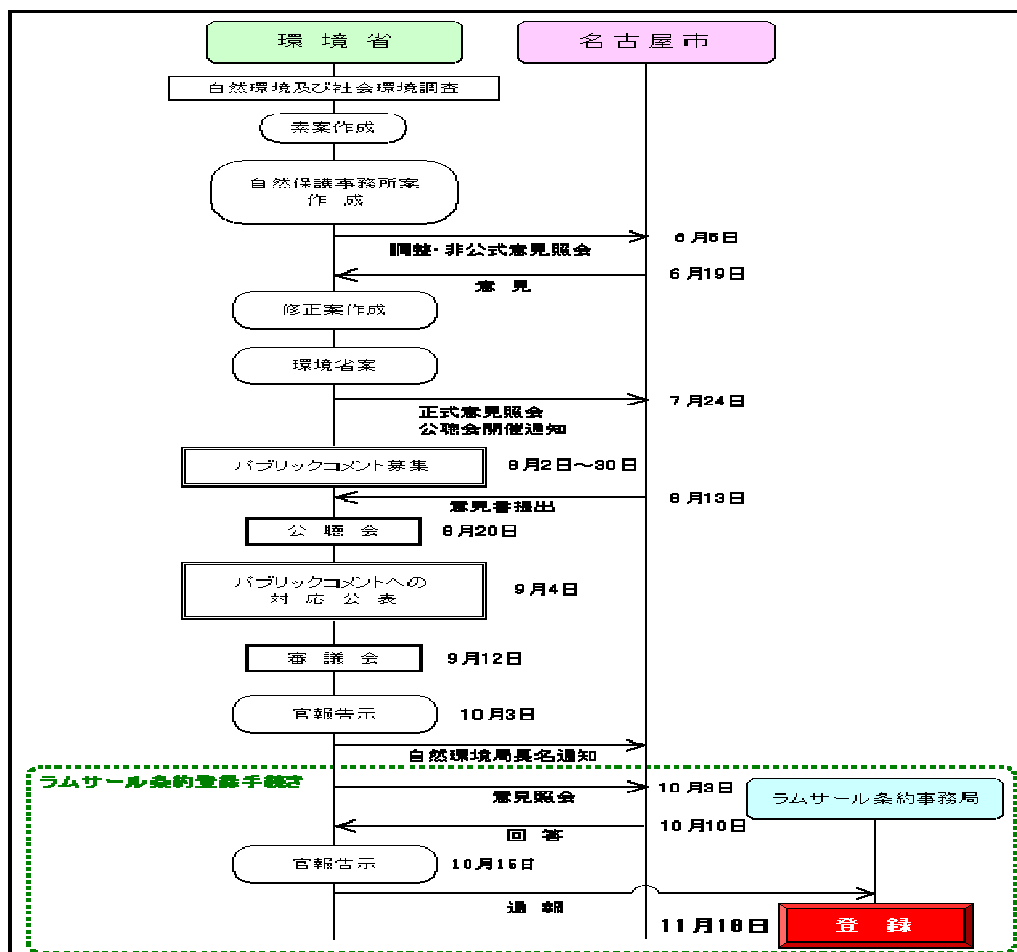
「湿地」の対象は広く、湖沼、浅い海、河川、干潟、沼などの自然の湿地のほか、水田などの水に関する場所のほとんどが対象になる

2006年2月1日現在、締約国150ヶ国で条約湿地数は1589ヶ所

条約湿地の条件

日本におけるラムサール条約湿地の選定は、以下の要件を満たす場所について行っている。

- 1、国際的に重要な湿地
- 2、国指定鳥獣保護区特別保護地区等の地域指定により、将来にわたり自然保護の保全が図られていること
- 3、地元自治体等から登録への賛意が得られていること



①：ラムサール条約登録までの流れ

3. 生物について

藤前干潟にはたくさんの生物が住んでいる。ゴカイ、アナジャコ、オサガニ、ソトオリガイ、ヤマトシジミなどの底生生物や、ヒメハゼ、エドハゼ、ボラ、イシガレイなどの魚介類が生息しており、鳥たちの餌にもなっている。また、アナジャコは、また、浄化能力も優れていて底泥下部への酸素供給に関して大きく貢献している。

生物の種類



③ー①アナジャコ



③ー②ゴカイ



③ー③オサガニ



③ー④ソトオリガイ



③ー⑤ヤマトシジミ



③ー⑥ボラ

4 問題と対策

藤前干潟の抱えている問題

- ・ 貧酸素水塊によるアナジャコの大量死。
- ・ 海のほうが土地の費用が安く済むから開発しすぎた開発問題。
- ・ 渡り鳥の減少。

貧酸素水塊により起こった被害

- ・ 貧酸素水塊が底辺生物（アナジャコ）の生息地に移動したために底辺生物が生きていくために必要な酸素が無くなり大量死した。

藤前干潟の問題の対策方法。

貧酸素水塊と保全の対策方法

- ・ 一人ひとりができること
干潟の重要性を知り、干潟に行って実際に肌で感じる。
- ・ 水をきれいにする
工場などをこれ以上開発しないようにする。
- ・ トラスト運動
干潟の土地を少しでも買う。
- ・ 干潟の面積を増やしたりする
- ・ 干潟の周辺を砂浜のようになると、酸素も供給される。

貧酸素水塊の対策方法は、原因は干潟の地形も関係しているので完全な対策方法は無い。

なぜ貧酸素水塊が発生するのか？

- ・ ヘドロなどが分解される時に酸素を消費してしまい酸素不足になってしまうから発生する。
ヘドロは水が汚いから発生する。



④ー① 藤前干潟を清掃している人々



④ー② 干潟を肌で感じる人々

5. 参考文献

藤前干潟を守る会：<http://www.fujimae.org/>

藤前干潟：<http://www.kankyo-net.city.nagoya.jp/fujimae/index.htm>

(名古屋市環境局環境都市推進部環境都市推進課)

6. 謝辞

訪問調査では不手際がありつつも受けて下さった長谷川先生には大変お世話になりました。

その他にもアドバイザー教員の方、居合わせた教員の方々にはお世話になりました、ありがとうございました。

7. 感想, 各自の貢献内容

「藤前干潟」

C07041 古橋 慧

感想：

私の班では、藤前干潟の保全方法を考えることをテーマに藤前干潟を調査しました。藤前干潟は、前期に授業で一度行きました。そのときの課題で藤前干潟に着いてのレポートが出されていて調査は意外に簡単にできると思っていました。ですが調査を進めていくと現状や問題点などがインターネットでは詳しく調べることができませんでした。そこで初めのころから予定していた前期にお世話になった環境生態学の長谷川先生の所に班のメンバー数人が現状や問題点、今後どのようにすればよいかなどを聞きに行ってくれました。

長谷川先生の所の訪問に行き教わったことは、今後の対策など、そして今後人間が手を加えても干潟は良くなると教えてくれて、私はそれを聞きとても驚きました。ですが、現状などを調べていくうちに人間が干潟に手を加えるということは、その生態系を壊してしまったりするからだと思いました。

今回の調査で私が感じたことは、人間ができることは環境良くしていくことも大切だと思いますが、その前に現在の状況をこれ以上悪くしないようにすることも大切だと思います。そして、もっと干潟がどのような状況なのかを知るべきだと思います。

この調査をしていくと、調べなくてはいけないことがたくさんできて、どうまとめるかがとても難しく、最終報告会だけで報告できないことがたくさんありました。

今回あまり班に貢献できなかったのも、また班で作業するときは貢献できるようにしていきたいと思っています。

私の貢献内容：

この班での調査の中で、私は中間報告会までは現状をインターネットで調べていました。ですがあまり詳しく調べることができませんでした。最終報告会までは、中間報告会で調べていなかった藤前干潟が抱えている問題、貧酸素水塊について調べました。そして長谷川先生の所の訪問のときの質問内容などを考え、レジメの作成のとき載せる内容を考えたりしてサポートしていました。最終報告会のときは、一部分の発表をしました。最終報告書の問題点の対策のページを作成しました。

感想：

私の班では藤前干潟について調査活動が続けてきた。

最初の時点では藤前干潟はどのようなものなのかというのを詳しく知る為に藤前干潟に関係があるものを調べてきた。その内容を中間発表としてまとめて発表した。中間発表時に干潟の問題点について詳しく教えて欲しいというコメントがあり、その時に問題点というのは今後の干潟の保全に関しても大きく関わってくるのではないかと思ったので、最終報告では干潟の問題点に内容を絞り込んだ。

その時に出てきた問題点が貧酸素水塊という現象が干潟に起こっており、干潟の浄化には欠かせない底生生物がその貧酸素水塊によって大量に死んでしまうという問題が出てきた。貧酸素水塊とは水中の酸素がほとんどない水塊であり、この水塊が水中生物の生息地に移動してしまえば生物は生きていく為に必要な酸素がなくなって一気に死んでしまうという問題である。原因の1つに人間の流す排水が考えられる。

干潟の形は保護されたものの、干潟の中身（生物等）がなくては干潟を保護した意味が無い。名古屋市も干潟がどれだけ重要か、今干潟に起こっている問題をもっと深刻に受け止めて、多くの人に呼びかけ等をして、排水やゴミ関係などをもっと改善して欲しいと思った。

私の貢献内容：

この班での調査の中で、私は中間、最終報告のパワーポイントを作り貧酸素水塊について調べました。

感想：

私の班では藤前干潟について調べました。まず前半では、基本的な藤前干潟についての調べ学習です。とくにラムサール条約に視点をおき重点的に調べました。

その中で、もしラムサール条約が無ければ、今ある藤前干潟が存在しえなかったことがわかってきました。日本および世界の抱えている問題であるごみ問題が騒がれ出したからです。これらを埋め立てる場所としては最適であったであろう当時の藤前干潟は、周辺住民やそこに携わる全ての人の協力によってラムサール条約に指定され、今の姿を保っているのです。

後半では、藤前干潟に生息する生物についてと今藤前干潟が抱えている問題点、それらの解決方法を調べました。生物については容易に調べることはできたのですが、問題点についてなどは、前半に比べ効率が悪く、最終的に長谷川先生の話聞いたことで完成に至りました。

今回の学習を通してとてもいろいろなことがわかったと思います。藤前干潟という地図で見たらほんの小さな場所で起こっている問題が、地球全ての問題点であることがわかって、いかに自分たちの今の現状が悪影響であるのかを痛感させられました。

これを気にみんなが気持ちを切り替え、一人一人が少しでも何かしなくてはと思えるようにできれば一番いいと思いました。

私の貢献内容：

この班での調査の中で、私はレジュメ作成およびポスター作成でした。

感想：

私の班では藤前干潟の保全について調査しました。この藤前干潟について以前この実習以外の授業で見学に行きました。そこで始めて干潟を見たとき驚いたというのが正直な感想で、こんな都会の中にもこれだけ水鳥が集まる場所があり、これは保全を考える必要があると思いました。

このような授業は初めてだったので取り掛かるときに若干戸惑いました。テーマを決めるときに以前少し学習したことなので調べやすいと思っていたのですが、同じような項目しか出てこなかったのも、より深く追求することができず、調査もうまく進みませんでした。

しかし、先生方のご協力もあり、名古屋大学の長谷川先生と連絡をとることができました。一時連絡が取れなくなり見捨てられたと思いましたが、なんとか訪問することができました。やはり環境の仕事に携わっている人の考えは、自分たちが考えないようなことまで考えていてさすがだと思いました。おかげで最終報告会では中間報告会のときより良い発表ができました。

今回の学習を通じて、藤前干潟を以前より知ることができたと思います。今回学んだ保全の方法の中には、私たち一般の人でもできることがあるので、少しずつでも行っていきたいです。

私の貢献内容：

この班での調査の中で、私は名古屋大学への訪問、レジュメの作成

「活動を終えて」

C07045 三嶋 大輝

感想：

私の班では・・・『藤前干潟の保全』について調査、報告しました。

藤前干潟については、前期の授業で一度行った事があったので、詳しく調べられると思いました。しかし、予想以上に調査が難航しました。インターネットで調べるのは限界がありました。

そこで、前期にビオトープの授業でお世話になった長谷川明子先生に「藤前干潟について」という題でお話を伺う事にして、名古屋大学に訪問しました。久しぶりに先生に会いました。少し余談を挟み、本題へ。さすが長谷川先生と思いました。私たちが調査仕切れなかった事も分かる限りの事を教えてもらいました。その結果、調査が進みました。先生にはとても感謝しました。

この調査を終えて干潟の大切さ、重要さを知りました。

一人ひとりの日々の心がけが必要で、自然を大切にするという気持ちを持って生活していかなければいけないと思います。

私の貢献内容

この班での調査の中で、私は、

インターネットなどで、調査、まとめを行った。

長谷川明子先生に訪問し、話を伺い、まとめを行った。

「干潟の重要性」

C07046 溝口 裕一郎

感想：

私の班では「藤前干潟の保全方法」について考えました。今回、「藤前干潟」について調査してわかったことは、干潟にはたくさんの小さな生き物がいるということ。しかし、干潟とつながっている伊勢湾を浚渫してしまったことにより「貧酸素水塊」ができてしまいました。この「貧酸素水塊」とは、水の中に含まれている酸素の量が極端に少ないことをいいます。酸素の量が減るとアナジャコなどの小さな生き物は生きていけません。小さな生物がいなくなると渡り鳥の餌もなくなってしまいます。このまま干潟周辺の開発を進めると干潟には何もなくなってしまいます。だから、絶対にこれ以上開発をしてはいけません。

また、干潟に流れ込む水もきれいにしなければならないこともわかりました。干潟につながっている川の上流の方からきれいにしないとはいけません。そのためには、川にゴミを捨てたりしないようにすることが私たちにもできることだと思います。私たち一人ひとりが少しずつでもできることをしていけば干潟もきれいになるし、街の景観もよくなると思います。私は干潟を保全していくために川にポイ捨てを絶対にしないようにします。

今回干潟を調べてみて、干潟の重要性を知ることができました。干潟がなくなると干潟に飛来する渡り鳥の休憩ポイントがなくなってしまうことになります。干潟がなくなると渡り鳥は困るはずですがそれは避けなければならないと思います。

私の貢献内容：

この班での調査の中で、私は以前「環境生態学」の授業でお世話になった長谷川先生にお話を伺うため名古屋大学に行ってきました。長谷川先生は保全と保護の違いを教えてくださいました。保全は人間がほとんど手を加えずに守っていくことです。保護は人間が手を加えて守っていくことです。

また、インターネットで藤前干潟に関する情報を集めました。

以上です。